No.12I03

茶道文化学術助成研究

平成二十五年度　研究報告書

研究題目

一般研究助成報告書　二年度

数寄屋大工『庄五郎』の事績と系譜に関する調査研究

研究者名　小出　祐子

索引No.　No.12I03

頁　p.3

公益財団法人　三徳庵

一般研究助成報告書

二年度研究報告

研究課題

数寄屋大工『庄五郎』の事績と系譜に関する調査研究

（研究代表）小出　祐子

一　はじめに

本稿は、二ヶ年にわたる「数寄屋大工『庄五郎』の事績と系譜に関する調査研究」の最終報告である。本研究の目的は、江戸時代後期に表千家出入りの大工として活動した数寄屋大工「庄五郎」の事績と系譜に関する調査研究を通して、近世の数寄屋大工が茶道文化の発展と継承に果たした役割を明らかにすることにある。近代の数寄屋大工らは、伝統と新たな技術、発想のもとで数々の佳品を生み出した。しかしそれに遡る近世の数寄屋大工の活動については、史料の制約などもあり十分に解明されていない点も多い。本研究では、公益財団法人竹中大工道具館が所蔵する「寺田家旧蔵数寄屋関係史料[一]」（以下「数寄屋史料」）を主要素材とし、近世数寄屋大工の具体的な活動の検証を試みる。なお本研究報告は、「数寄屋史料」の調査に関わる日本建築史及び茶道史を専門とする研究者グループ[二]の共同研究成果に基づくものである。

一―一　初年度の調査研究成果

初年度に行った基礎作業として、「数寄屋史料」の写真撮影及び目録の整備、主要史料の活字翻刻、図面のリライトがあげられる。これらのデータ化した基礎資料を共同研究者間で共有し、それに基づく個別史料の検証を分担して進めた。その成果として、初年度の調査研究報告書[三]では次の点を指摘した。

①　数寄屋大工庄五郎について

◇庄五郎の活動時期と系譜

「数寄屋史料」において庄五郎の名がみえる年紀の明らかな史料は、文化八年（一八一一）に限られ、そのほとんどが表千家の建築に関わるものであった。このことから、彼が当時表千家出入りの大工として活動していたことがわかる。また、先行研究[四]によって「庄五郎」を名乗る数寄屋大工は、文化年間（一八〇四～一八一八）及び文久二年（一八六二）に存在したことが知られている。この半世紀という活動時期の隔たりや、近代の数寄屋大工、上坂浅次郎（一八六九～一九二八）が「御数寄屋師庄五郎五世孫（傍点筆者）」を称した[五]ことなどから、庄五郎の名跡は近世から近代にわたって継承され、上坂浅次郎の系譜へとつながる可能性がある。

◇庄五郎の事績―表千家及び茶人住山宗仙との関わり

「庄五郎」の活動と事績は、彼の出入り先であった表千家（京都市上京区）の建築と深く結びつく。「数寄屋史料」の記述内容から、同人が表千家屋敷の比較的近くに居住し、書院（残月亭）や茶室（不審庵）などの図面、絵図、寸法書を記録したことが確認された。【図一】は史料[六]に記載された庄五郎の住所「下長者丁通室町東へ入」と表千家の位置関係を現在の地図に落とし込んだものであるが、その距離は直線にしておよそ一・五キロメートル以内の範囲におさまる。

また、これらの史料を庄五郎に作成させ、自らも古記録を写し留めた人物として、表千家に深く関わる茶人、住山宗仙（二代住山楊甫）【図二】を取り上げ、庄五郎が同人との交流を背景に、表千家の普請の記録に携わったことを指摘した。

②　茶室普請にみる数寄屋大工と茶人の交流

庄五郎ら江戸時代の数寄屋大工が茶人との関わりのもとで活動したことに注目し、「数寄屋史料」に残される数寄屋大工と茶人とのあいだに交わされた深三畳大目茶室計画の打ち合わせ史料[七]から、工匠と施主という立場の彼らがどのような連携をもって茶室の普請を進めたのかを考察した。その結果、茶室に用いるべき材種から各種寸法、柱の色付け具合に至るまで、事細かに施主の意向を仰ごうとする数寄屋大工の姿勢が明らかになった。

③　天明大火後の表千家再建計画の変遷

文化年間に庄五郎が出入り大工をつとめた表千家は、それに遡る天明八年（一七八八）、京都の大半を焼き尽くしたいわゆる天明大火により類焼した。その後再建された建物の大半は、明治三九年（一九〇六）に再び焼失し、現在の建物群は明治末年から大正初年にかけて再建されたものである。「数寄屋史料」には、この天明大火に焼失した表千家屋敷の再建計画に関わるスタディ図と思われる一連の図面[八]が残る。これらの作成に庄五郎が関わったとの確証はないが、江戸時代後期の数寄屋大工の具体的な活動を示すものとして注目し、現在へとつながる表千家の屋敷の構成が形作られていくプロセスを検証した。

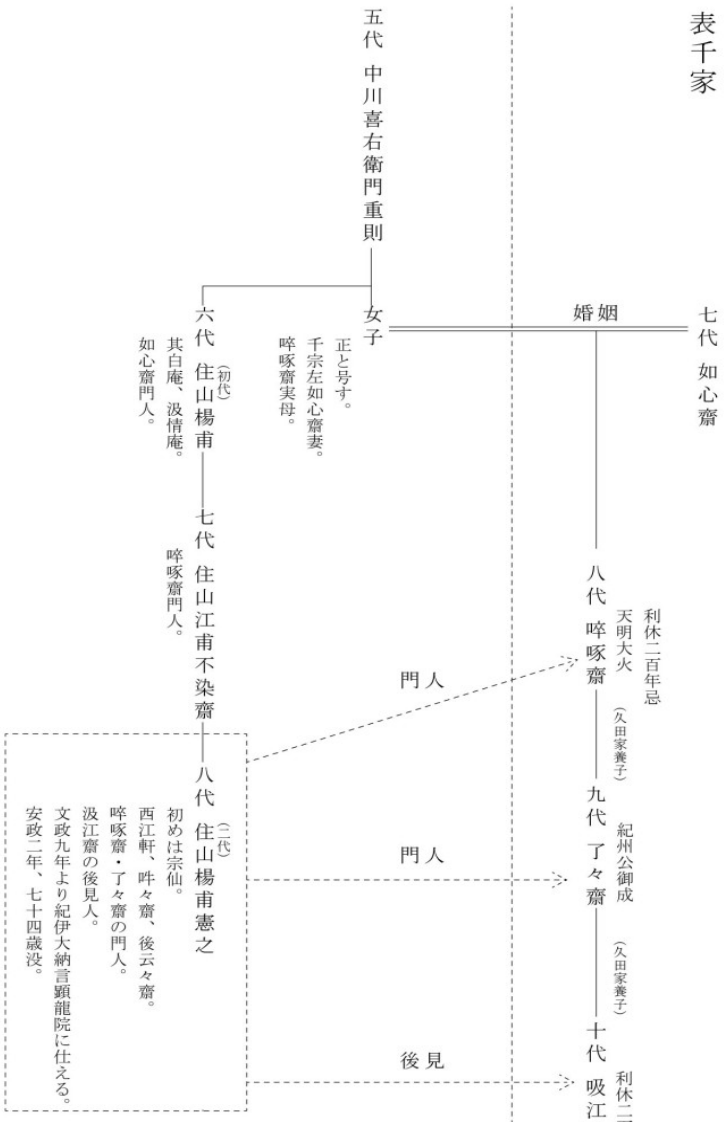
一―二　二年度の課題

以上のような研究成果と共に、初年度の研究報告では二年度に取り組むべき課題として、表千家の建物を記録に留めるという数寄屋大工庄五郎の活動が、茶人らのいかなる要請に基づくものであったのかを考察し、史料が作成された背景を明らかにすることの必要性を指摘した。そこで本年度は、「数寄屋史料」から庄五郎や住山宗仙がしたためた表千家の建築に関わる古記録の内容を精査し、本研究課題のとりまとめとして彼らが江戸時代後期の表千家において果たした功績について検証した。

【図一】庄五郎の居所と表千家の位置関係（C一一〇一三一「残月亭寸法　附三畳敷」をもとに作成）

【図二】表千家と住山家（井口海仙、久田宗也、中村昌生編『京の茶家』墨水書房、一九六九年をもとに作成）

『公益財団法人三徳庵 茶道文化学術助成研究平成二四年度研究報告書』から再掲



二　二年度の調査研究から得た知見

二―一　数寄屋大工庄五郎及び茶人住山宗仙関連史料について

数寄屋大工庄五郎が作成した表千家の諸建築に関する記録のなかには、茶人住山宗仙や表千家当主千宗左に宛てたものが存在し、庄五郎の活動が茶人らの意向を反映したものであったことをうかがわせる。そこで「数寄屋史料」から住山宗仙あるいは庄五郎の名、または印の捺された史料をすべて抽出【表一】し、内容の検討を行った。それらを作成者ごとにまとめると、次のようになる。

①住山宗仙が筆写または所持していた史料

◇史料a「不審庵指図寸間之記」（C一一〇一二九）【写真一】

表千家茶室不審庵及び水屋についての寸法書である。史料に記された水屋の位置[九]などから、天明大火（一七八八）に焼失する以前の姿を記したものと考えられる。史料の奥書に「享和三癸亥歳七月下旬写之　住山宗仙（花押）」とあり、底本[一〇]を大火後の享和三年（一八〇三）に住山宗仙が写し留めたものである。

◇史料b「不審菴之図　書附添」（C一一〇一三〇）【写真二】

表千家書院（残月亭）及び不審庵、露地について、天明大火に焼失する前の姿を俯瞰的に描いた絵図と書附からなる。住山宗仙が底本[一一]を天明大火後に写し留めたもので、建物に関しては「惜哉天明之大火ニ尽焼失ス」と、大火によってすべてが類焼したことを嘆く記述がみえる。焼失前の利休堂を「萱葺ニシテ網代開戸内ハ加茂川敷石也、正面大石之上ニ居士之立像ヲ安置ス」と記すなど、現状とは異なる旧態を具体的に伝える。

◇史料ｃ「残月亭建画図」（Ｃ一一〇一三一）【写真三】

残月亭及び九畳（八畳大目）、そして三畳敷（二畳大目向板）を含んだ起絵図である。史料には「住山」と書入れがあり、住山宗仙が所持していたものと考えられる。この三畳敷（【写真三】中央上部）は現存しないが、天明大火以前の表千家を描く絵図[二]などには存在が確認できる。先に掲げた史料ｂ「不審菴之図　書附添」には「不審庵ト上段之間ニ続テ三畳敷有、逢源斎之好所也（傍点筆者）」とあり、この席が四代江岑宗左の好みであったと伝える。このように天明大火以前の平面と似た部分がある一方で、残月亭の南側など大火以後の姿に似ている部分が併存し、作成年の特定に検討を要する史料である。

②庄五郎が作成し、住山宗仙、表千家当主に提出した史料

◇史料ｄ「道安様御好之四帖半御数寄絵図寸法写」（Ｃ一一〇一三八）【写真四】

史料表紙には「文化八未四月廿四日　大工庄五郎」とあり、宛先を「住山様」とする。文化八年（一八一一）、庄五郎が住山宗仙の求めに応えて道安囲いの四畳半茶室の図及び寸法を書写したものであり、「数寄屋史料」において住山宗仙と庄五郎との直接的なつながりを示す唯一の史料である。天明大火後の復興に伴い再建された表千家の祖堂に関わる図[三]とみられ、平面図、南立面図、北、東、西面の展開図と共に、南面及び東面に設けられた下地窓の姿図を縮尺一〇分の一で描き、図中に墨書及び朱書をもって各部分の寸法や仕様を細かに記す。

◇史料ｅ「利休形中潜り起絵図」（Ｃ一一〇一四六）【写真五】

史料をおさめる袋外題に「利休形中潜り起絵図　数寄家大工匠五郎」とあり、本史料によって匠（庄）五郎が自ら「数寄家（屋）大工」を称していたことが知られる。袋の中には、竪紙一枚の表裏それぞれに縮尺一〇分の一で描かれた中潜りの図、切紙に「覚」と題した中潜りの寸法書、そしてこれらの史料作成費用として、庄五郎から表千家当主千宗左宛てに代金二〇〇疋を求めた請求書「覚」がおさめられる。請求書に「未三月」とある以外に年紀は記されないが、他史料との比較からこれは文化八年に相当し、宛先の千宗左は九代了々斎を指すとみられる。「利休形」とされる本図の中潜りは、杉皮葺屋根をかけた衝立状の壁面の端に寄せて潜り口を設けて板戸をたて、もう一方の端部には縦長の下地窓をあける。その形式や宛先から、本図は表千家の露地に設けられた中潜りを描くものとみなされる。

③庄五郎が作成した史料（宛先不明）

◇史料ｆ「残月亭寸法　附三畳敷」（Ｃ一一〇一三二）【写真六】

残月亭、及び史料ｃ「残月亭建画図」でとりあげた二畳大目向板の席（三畳敷・現存せず）の寸法や仕様が詳細に綴られた冊子で、「右之通相違無御座候、以上　京下長者丁通室町東へ入　大工庄五郎」と、作成者として庄五郎の名と住所が記されている。史料ｃと同様に、年代の特定に今後の検討を要する史料である。

◇史料ｇ「不審庵　外待合絵図寸法書」（Ｃ一一〇一四五）【写真七】

冒頭に待合の主要寸法が箇条書きで記され、朱書及び墨書で各部の寸法や仕様が記された待合の図一点が描かれる。腰掛け部分は一畳の畳敷きと半畳の板敷きから構成され、一方の壁に下地窓を設ける。その形状や規模は、現在の表千家外露地に設けられた外腰掛と細部に至るまできわめてよく似る。史料に作成者の名前はないが、料紙右下隅に捺された印形から、庄五郎の手によるものと判断される。

◇史料ｈ「四畳半附　御水谷絵図并寸法書」（Ｃ一一〇一四九）【写真八】

水屋の展開図三面（正面、両側面）と各部寸法を記した竪紙史料一枚と、その起絵図一点が袋におさめられる。起絵図には「大工庄五郎」の名と共に印が捺され、同人によって作成された史料であることを伝える。水屋は正面の壁に連子窓と二段の棚を設け、下段の簀子棚は向かって左の壁より二尺六寸（約七九センチメートル）の長さで止め、上段の棚から釣木で固定する。史料に具体的な茶席名は記されないが、本図に描かれる形式に類似するものとして、表千家祖堂に設けられた二畳（一畳大目向板入）の茶席「反古張席」に付属する水屋があげられる[四]。これらが結びつくものならば、外題の「四畳半」は天明大火後に再建された祖堂

の道安好み四畳半を示すことになる。

◇史料ｉ「水谷建絵図寸法」（Ｃ一一〇一五〇）【写真九】

水屋の起絵図一点と仮綴じされた冊子体の寸法書（外題「水谷之寸法」）が袋のなかにおさめられている。さらに別紙として、寸法書の一部を抜き出して文言や寸法値を変えた二枚の史料が付属する。別紙のうち一枚の末尾に「右庄五郎所持」とあり、同人が保有していた水屋史料の写しと考えられる。水屋は正面の壁に二段の棚を設け、向かって左隅には二重の釣棚をしつらえる。水屋棚の左手には物入れがつくられている。ここに描かれた水屋の構成を左右反転させると、現在の表千家の九畳に付属する水屋ときわめてよく似ている。

◇史料ｊ「利休形大之方猿戸絵図寸法書」（Ｃ一一〇一五一）【写真一〇】

猿戸とは、内露地に設けられる二本の掘立柱に戸を備えた形式の簡素な木戸で、利休形として大小の型がある。本史料は、その利休形猿戸の「大」形式について記したものである。袋のなかには二枚の切紙がおさめられる。一枚の切紙には、猿戸の寸法や仕様が記されると共に、猿戸の内側、外側の姿図二面が描かれる。もう一枚の切紙には、猿戸の戸締まりのために取り付けられた「くゝろ（枢）」の詳細図を描く。ここに示された猿戸が遺構の実測に基づくものか、新たな設計図として描かれたものかを本史料のみから判断することは難しい。作成者として「大工匠五郎」の名が記されるが、押印や宛先はなく、作成年も不明である。

【表一】「数寄屋史料」にみられる庄五郎、住山宗仙関係史料一覧

史料	登録番号	史料名	作成者	制作年	備考
a	Ｃ一一〇一二九	不審庵指図寸間之記	住山宗仙	享和三(一八〇三)	
b	Ｃ一一〇一三〇	不審菴之図　書附添	吽々斎(住山宗仙)		
c	Ｃ一一〇一三一	残月亭建画図			住山宗仙所持か
d	Ｃ一一〇一三八	道安様御好之四帖半御数寄絵図寸法写	庄五郎	文化八〈一八一一〉	住山宗仙宛
e	Ｃ一一〇一四六	利休形中潜り起絵図	匠(庄)五郎	未(文化八〈一八一一〉)	千宗左(了々斎)宛
f	Ｃ一一〇一三二	残月亭寸法　附三畳敷	庄五郎		
g	Ｃ一一〇一四五	不審庵　外待合絵図寸法書	庄五郎(印のみ)		
h	Ｃ一一〇一四九	四畳半附　御水谷絵図并寸法書	庄五郎		
i	Ｃ一一〇一五〇	水谷建絵図寸法	庄五郎		
j	Ｃ一一〇一五一	利休形大之方猿戸絵図寸法書	匠(庄)五郎		

・「寺田家旧蔵数寄屋関係史料について」（小出祐子ほか『竹中大工道具館研究紀要　第二六号　二〇一五年』）所収目録より作成。

・登録番号は竹中大工道具館の文献史料データベースに基づく。

二―二　数寄屋大工庄五郎及び住山宗仙による古記録筆写の背景

本稿二―一で紹介した史料のうち、ａ～ｃは住山宗仙が筆写、あるいは所有していたもので、そのうちａとｂは同人が天明大火後に焼失前の表千家の建物を記録したことが明らかな史料である。前掲【図二】に示したように、表千家七代如心斎の妻を大伯母に持ち、八代啐啄斎と九代了々斎に師事した住山宗仙にとって、表千家の古昔を学び旧態を書写することは意義深いことであったのかもしれない。しかしこうした古記録の収集や書写は住山一個人の嗜みに留まらず、天明大火から十数年を経た表千家における復興活動の一つともとらえられるのではないだろうか。住山

宗仙が史料ａを書写した翌年の享和四年（一八〇四＝文化元年）には、啐啄斎が隠居し、了々斎へと当主が交代するに至った。住山は門人としての立場から、新当主となった了々斎のために古記録の渉猟をはかったとも推測される。

そうした経緯―すなわち、失われた過去の建築を記録保存し、次代へと継承する、という意志をもって住山宗仙が天明大火前の古記録を諸方から求めたとするならば、庄五郎のような出入りの数寄屋大工は重用される存在であっただろう。庄五郎が作成し、あるいは同人のもとに保有されてきたｄ～ｊなどの史料は、住山宗仙、ひいては表千家にとって蒐集すべき古記録だったと考えられる。たとえば残月亭の寸法仕様を詳述した史料ｆには別紙として、残月亭付書院の袋戸を描いた簡略な図が付属する。図には「残月亭　附書院ノ下二枚　引違之戸引手　打様寸法　大工庄五郎ヨリ来ル」と書き込まれ、庄五郎が残月亭に関する細かな部分の記録も提供していることがわかる。この史料ｆに住山宗仙の名は見えず、作成年も不詳である。しかし本稿二―一で述べた現存しない「三畳敷」に関する記述を含み、住山が所持していたことが明確な史料ｃなどと関連の深い内容をもつ。従って本史料についても、庄五郎に記録の提出を命じた人物として関与があった可能性は高い。そしてこのような動きは、表千家においてその後も継続する。史料ｅは、文化八年に作成されたとみられる表千家の中潜りに関する記録であるが、先に述べたように庄五郎は住山宗仙ではなく、当主「千宗左（了々斎）」に絵図寸法書を差し出し、作成費として代金二〇〇疋を請求している。作成年の判明する関連史料が限定され推定となるものの、享和三年の住山自身による筆写から八年を経るなかで、建築記録の作成が大火後の表千家の活動の一つとして定着し、その任務に携わる数寄屋大工庄五郎の役割が増大していることが読み取れるのではないだろうか。

その活躍を反映するかのように、庄五郎が記録した対象は多岐にわたる。残月亭や不審庵といった表千家の主要建築だけでなく、庄五郎は露地の中潜りほか、水屋（ｈ、ｉ）や待合（ｇ）に関する図面も手がけている。これらの史料が、焼失前の遺構に関する記録を示すものか、あるいは再建に際して新たに作成された図であるのかはわからない。先に掲げた史料ｆが表千家出入りの大工であった庄五郎のもとに保存されてきたことを考えると、これらもまた、天明大火以前より庄五郎が保有していた普請記録を同人が浄書したものかもしれない。

本稿一―一で述べたように、本研究では初年度の調査報告において、庄五郎の名が代々継承され、近代に至る可能性を指摘した。文化年間以前の庄五郎の活動については判然としないところも多いが、天明大火以前の古記録を保有していたと考えられる同人の活動からは、表千家出入り大工という立場が一八世紀以前に遡り、建物の継承に貢献してきたことが推察される。このように表千家の建築形式は、彼ら工匠による記録という行為を通して伝来されていった。

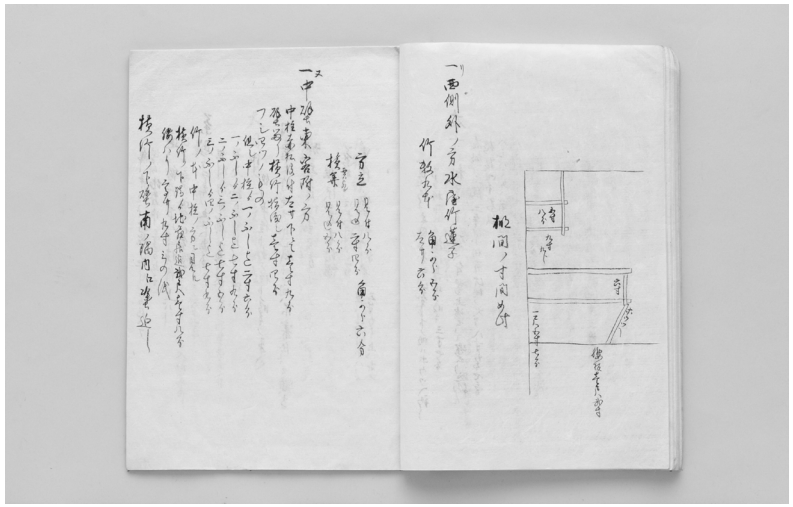
三　おわりに

本年度の調査研究では、数寄屋大工庄五郎が作成した史料と共に、茶家の門人であった住山宗仙による蒐集史料に注目した。表千家八代啐啄斎、九代了々斎に師事した住山宗仙は、天明大火後の享和三年（一八〇三）前後に、焼失する前の表千家の建築に関する史料を渉猟し、書写した。これらの史料は大火前の建築に関する記録として貴重であるが、表千家当主に師事した茶人によって蒐集されたことがわかるという点でも興味深い。蒐集した古記録を茶人自ら、あるいは工匠に筆写させた目的の一つには、大火からの復興に際し、旧態を記録として留め、継承するということがあったと考えられる。罹災、そして当主の代替わりを迎えるなかで、出入りの大工をはじめ諸方から古図類を渉猟し、記録に残したことは、住山ら門人の事績として評価すべきであろう。

史料を通して江戸時代の茶家と門人の多岐にわたる活動の一端が明らかになった。

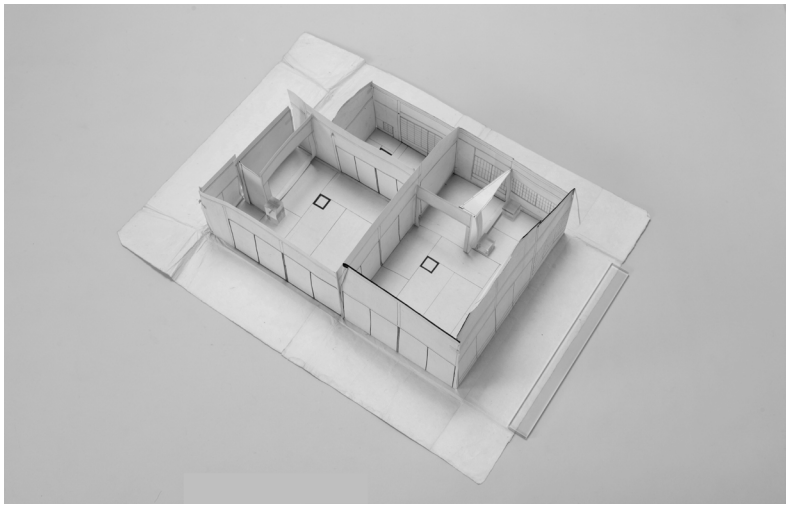
そして、住山宗仙によるこうした古記録蒐集の大きな助けとなったのが、数寄屋大工庄五郎であった。表千家の出入り大工という立場から、庄五郎は自らが所有していた史料の書写などをもって茶人の求めに応じる。このようにして庄五郎が留めた建築は、残月亭や不審庵ほか、待合や中潜り、水屋といった表千家の様々な部分に及ぶ。天明大火に焼失した表千家が再建を進めるにあたり、その普請に工匠として携わるということは、出入りの数寄屋大工のつとめであっただろう。それだけでなく、遺構の旧態を職人の立場から知悉し、その記録を所有する存在としても重要な役割をもっていたことが本史料から推測される。度々の罹災にみまわれてきた表千家の普請計画やその形式の継承に、出入りの数寄屋大工が果たした役割が明らかとなった。

最後に、二年度にわたる本研究を通して、今後に残された課題についてまとめておきたい。研究をすすめるなかで、近世における数寄屋大工の活動の背景には、それを指示した住山宗仙ら茶人の存在が大きく関わっていたことがわかった。庄五郎による図面や絵図類の制作が、茶人、そして表千家の意向に基づくものであったことは、本稿で述べたとおりである。しかし本研究で取り上げたこれらの史料には、年紀が記されず時代の特定が困難なものもあり、天明大火後にそれぞれがいかなる有意性をもって書写あるいは蒐集されたのかという点に十分にふみこめなかった。蓄積された古記録が大火後の表千家の建築にどのように寄与したのかを考察することで、彼らの蒐集活動の目的もより具体的になるであろう。そして「数寄屋史料」には、作成者の記されない、庄五郎以外の手によるとも思われる江戸時代の表千家に関わる実測図も含まれる。これらと近代に再建された現状遺構との異同を比較検討することも、近世から近代へと至る数寄屋大工の作風の共通性と相異をとらえるうえで必要だと考える。

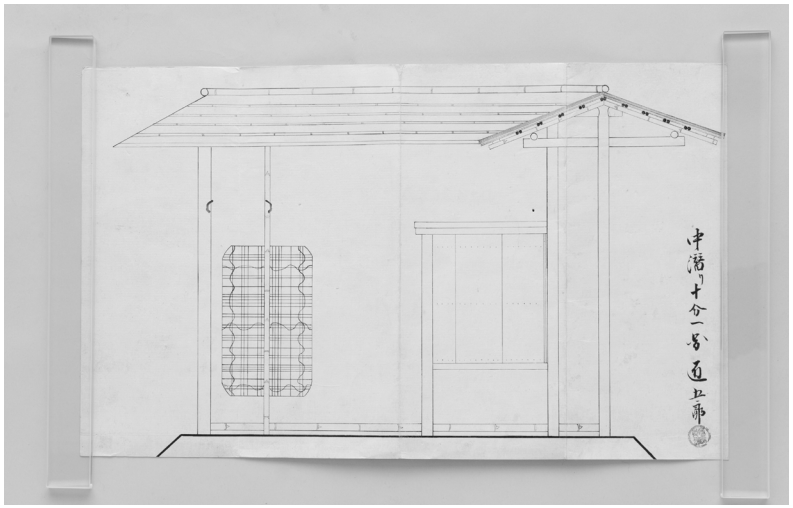


【写真一】史料ａ
「不審庵指図寸間之記」

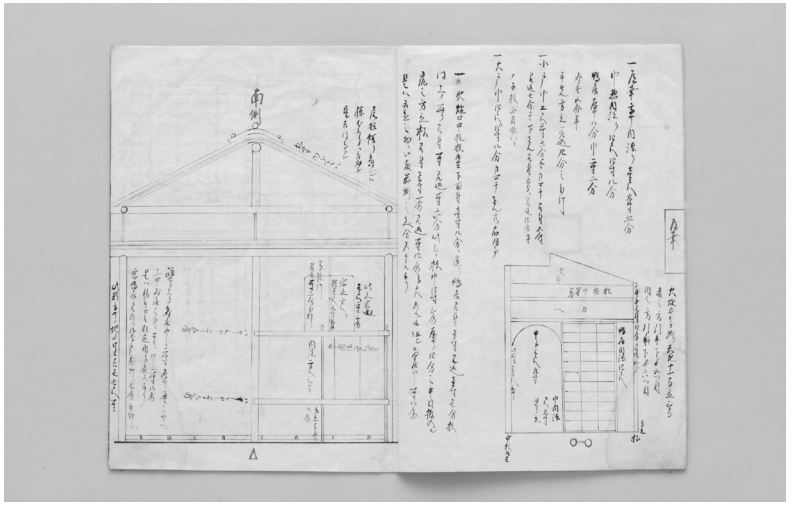
【写真二】史料ｂ
「不審菴之図　書附添」



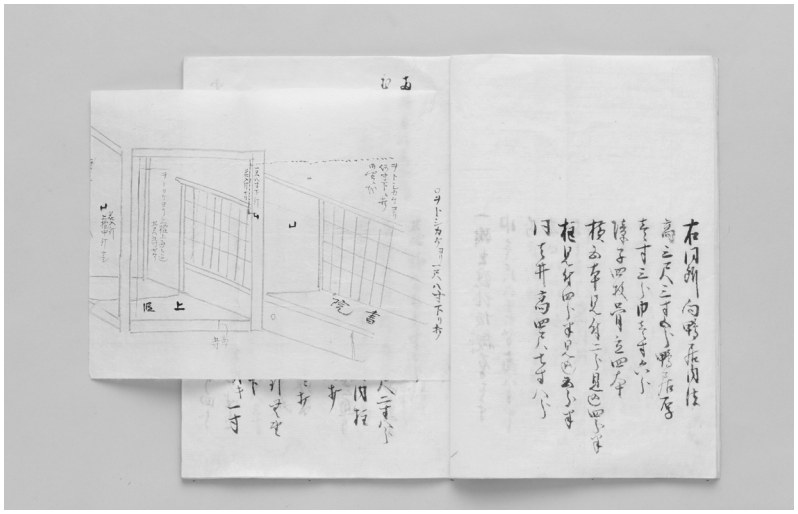
【写真三】史料ｃ
「残月亭建画図」



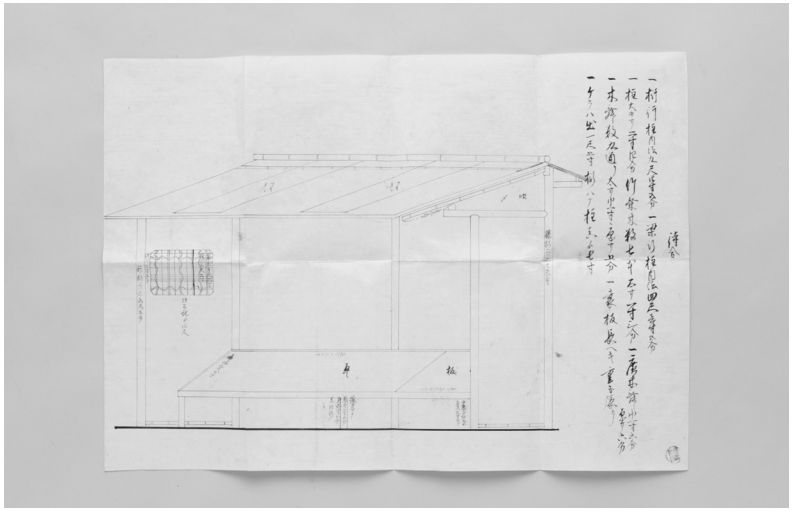
【写真五】史料ｅ
「利休形中潜り起絵図」



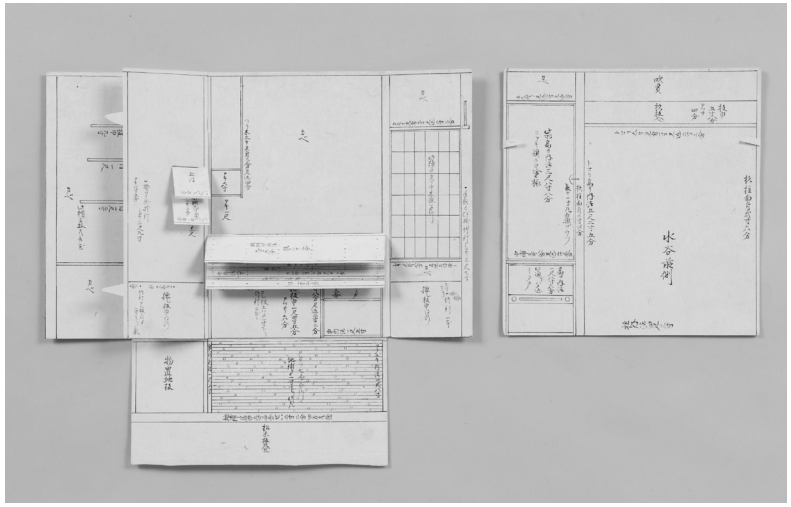
【写真四】史料ｄ
「道安様御好之四帖半御数寄絵図寸法写」



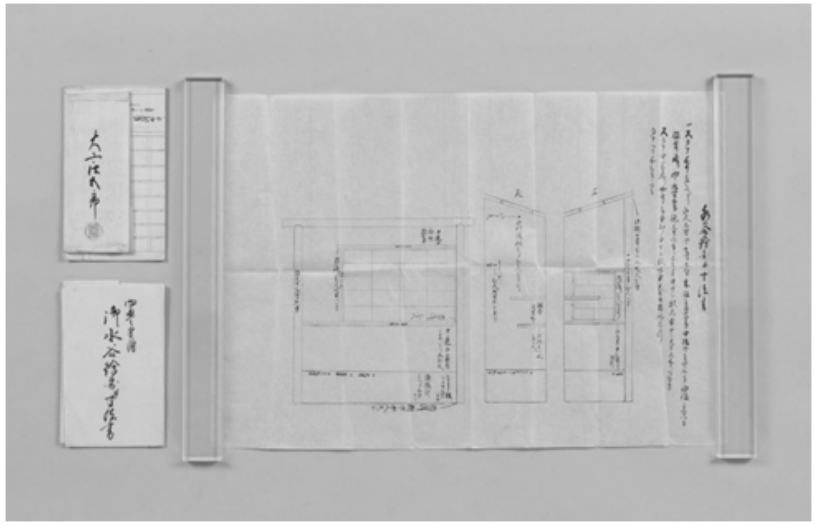
【写真六】史料ｆ
「残月亭寸法　附三畳敷」



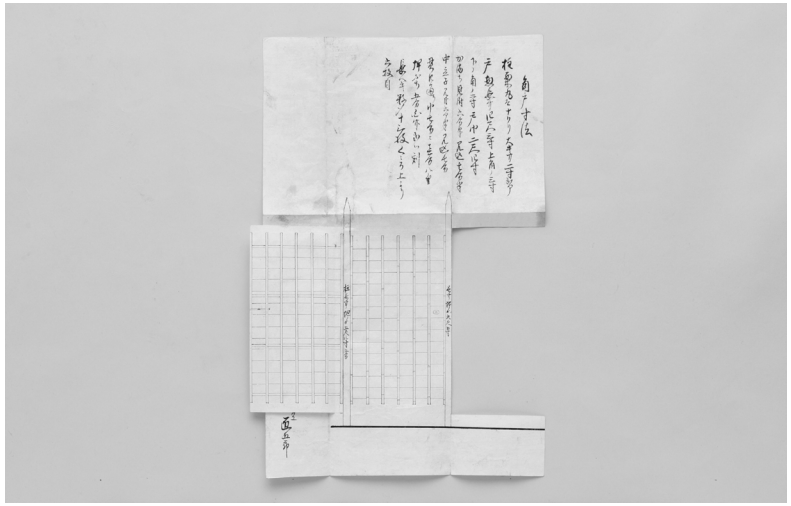
【写真七】史料ｇ
「不審庵　外待合絵図寸法書」



【写真九】史料ｉ
「水谷建絵図寸法」



【写真八】史料ｈ
「四畳半附　御水谷絵図并寸法書」



【写真一〇】史料ｊ
「利休形大之方猿戸絵図寸法書」

注

一「寺田家旧蔵数寄屋関係史料」は、旧蔵の寺田家において各地の茶室や数寄屋建築に関する古記録を中心に諸方から蒐集された史料群である。初年度報告では当史料を「旧寺田家文書」と仮称していたが、本報告では現所蔵先の竹中大工道具館において定められた史料名「寺田家旧蔵数寄屋関係史料」に統一する（小出祐子、日向進、桐浴邦夫、八尾嘉男、松本康隆、坂本忠規、中村琢巳、加藤悠希「寺田家旧蔵数寄屋関係史料について」『竹中大工道具館研究紀要　第二六号　二〇一五年』所収、二〇一五年三月）。

二 本研究グループが行った「数寄屋史料」全般に関わる調査報告については前掲注一を参照されたい。

三 小出祐子「数寄屋大工『庄五郎』の事績と系譜に関する調査研究」（『公益財団法人三徳庵 茶道文化学術助成研究平成二四年度研究報告書』一九頁～二七頁、二〇一四年六月）

四 中村昌生『数寄の工匠　京都』淡交社、一九八六年。

五 日向進「西芳寺の茶亭」（梅原猛監修『西芳寺―新版古寺巡礼京都 三六』所収、淡交社、二〇〇九年）

六 C一一〇一三二―〇一「残月亭寸法　附三畳敷」。史料名冒頭の登録番号は、所蔵先の竹中大工道具館の文献史料目録に基づく。

七 C一一〇一六五「（三畳大目茶室）」

八 C一一〇一三六―〇二～C一一〇一三六―〇九「小菊　廿」

九 天明大火に焼失するまでの不審庵は残月亭の南側に位置し、水屋は茶道口の西側に設けられていた。史料aはそのような旧態を示す。

一〇 本史料とほぼ同じ内容をもつものとして、「不審庵指図仕様帳」（中村昌生編『数寄屋古典集成〈二〉』所収、小学館、一九八九年）が知られている。

一一 本史料に類似する図として、堀内宗完筆「天明年前不審庵路地之図」（千宗左編『表千家』所収、角川書店、一九六五年）などが知られている。

一二 C一一〇一六一「千家全図写」など。

一三 天明大火以前の表千家において、祖堂は現状とは異なる石敷き土間のものであったが、大火後八代啐啄斎によって道安好みの形式に改められたという。

一四 ただし現在の「反古張席」に付属する水屋と本図とは、前者が左右の壁に下地窓を設けないなどの相異がある。

平成二十五年度茶道文化学術助成研究として提出された研究報告書を編集いたしました。
なお、今回の研究報告書に添付された資料・図表等は、すべて掲載致しております。

公益財団法人三徳庵 事務局
〒一六〇-〇〇一七 東京都新宿区左門町二〇
TEL 〇三（五三七九）〇七五三（代）

発行：平成二十七年六月十二日